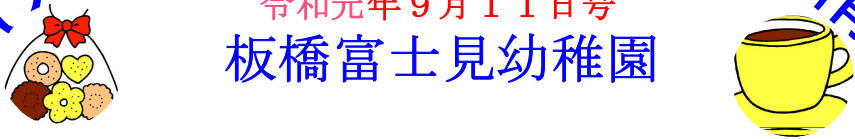


ふじみさらだボール子育て情報

「経験はいつか繰り返す」
令和元年9月11日号
板橋富士見幼稚園



「ね、何した？ねえ何したの？」

子どもは、生まれたとき、新品の何も記憶のないコンピューターと同じです。この世に生を受け、初めてハードディスクが動きはじめます。最初にキーボードを押すのは、お母さんですね。「私が、あなたのママよ」と語りかけると、じっとその声に全神経を向けて、「今の声は、誰だろう」とハードディスクは、考えはじめなのです。その声の回数が多く聞かれることで、この人が「私をお世話してくれる人」と記憶します。ここまでは、コンピューターと同じなのですが、人には、コンピューターと最も違う記憶方法があります。それは、「触れる」「匂いを嗅ぎ分ける」「味で感じる」こと。人は、相手の温もりを皮膚で感じ、臭覚でお母さんやお父さんを判別したりします。つまり、人は、生まれてすぐに言葉で話せないかわりに、五感の感受性がとても鋭くできているのです。



さて表題の「経験はいつか繰り返す」というお話をしましょう。

あるお母さんからこんな話を聞きました。待望の男児が生まれ、かわいくて大切に大切に育て、手一つ上げることなく、大きな声を張り上げることなく育ててきました。しかし5歳になり、自分のしたいことやできることがたくさんできて、お母さんの言うことを聞かなくなってしまい、思いあまったお母さんは、何気なくその子の手を、つねったそうです。今まで、経験したことの無い痛み「ねえ、今何した？ねえいま何した？」「こうしたでしょう」「それなあに？」「痛かった、痛かったよ」「今何したの？」

と連発したそうです。初めて経験した、「つねられ」は、その子の記憶に強く焼きついてしまいました。

数ヶ月後、その子は幼稚園で、自分の思いがはせないとき、たびたび相手をつねり、保育者から叱られたそうです。幼児期の体験や経験は一度刷り込まれると、自己判断がつくまでは、こうした経験を繰り返してしまいます。自己判断や自己抑制が身につくにつれて次第に押えられていくのですが、自分が押えきれなくなったときは、やはり一度覚えた「つねる」を無意識に繰り返してしまうのです。

ほんの少しの体験や行動も、ハードディスクはしっかり記憶し、長期にわたり保存してしまいます。消し去るためには、温かな愛情を実感させてあげることが大切ですね。

愛し、愛され、叱り、叱られて、この両面があるから、価値がわかり、判断がつくのです。

「適当」な子育ては、一番よいバランスなのかもしれませんね。お母さん。

URL:<http://www.homepage2.nifty.com/itabashi-fujimi/>

E-Mail address:itabashi-fujimi-yochien@mbh.nifty.com

50'Anniversary 2001